

2022 年度 関西大学総合情報学部
スポーツ・フロンティア入学試験問題

小論文

注意事項

- 試験時間は 90 分です。
- あなたの受験番号を下記欄に記入してください。
- 解答はすべて、解答用紙に記入してください。
- ※欄は記入しないでください。

受験番号					
------	--	--	--	--	--

〔問題1〕および〔問題2〕に答えなさい。

〔問題1〕

下表は、新型コロナウイルスに関する間違っただ情報や誤解を招く情報（フェイクニュース）の受容度を調査した結果である。

番号	間違っただ情報や誤解を招く情報（フェイクニュース）	回答者数	A [%]	B [%]	C [%]
1	新型コロナウイルスは熱に弱く、お湯を飲むと予防に効果がある	585	8.1	26.5	65.5
2	お茶・紅茶を飲むと新型コロナウイルス予防に効果がある	260	18.0	36.0	46.1
3	こまめに水を飲むと新型コロナウイルス予防に効果がある	373	28.7	38.7	32.6
4	納豆を食べると新型コロナウイルス予防に効果がある	447	9.6	38.9	51.5
5	ニンニクを食べると新型コロナウイルス予防に効果がある	134	14.8	27.4	57.7
6	ビタミンDは新型コロナウイルス予防に効果がある	143	24.0	42.5	33.5
7	花こう岩などの石はウイルスの分解に即効性がある	134	2.4	8.5	89.1
8	漂白剤を飲むとコロナウイルス予防に効果がある	133	3.1	4.6	92.3
9	新型コロナウイルスは5Gテクノロジーによって活性化される	122	4.4	11.1	84.6
10	日本で緊急事態宣言が発令されたら3週間ロックダウン（外出禁止）	175	15.5	42.5	42.0
11	日本政府が4月1日に緊急事態宣言を出し、2日にロックダウン（外出禁止）を行う	246	14.8	44.1	41.1
12	日赤病院が「コロナ病床が満床」「現場では医療崩壊のシナリオも想定」といった発表を行った	167	19.5	40.7	39.7
13	トイレトペーパーは中国産が多いため、新型コロナウイルスの影響でトイレトペーパーが不足する	610	6.2	30.6	63.2
14	武漢からの発熱症状のある旅客が、関西国際空港の検疫検査を振り切って逃げた	194	21.5	49.2	29.3
15	新型コロナウイルスについて、中国が「日本肺炎」という呼称を広めようとしている	223	28.8	39.9	31.3
16	新型コロナウイルスは、中国の研究所で作成された生物兵器である	775	21.0	53.7	25.3
17	死体を燃やした時に発生する二酸化硫黄（亜硫酸ガス）の濃度が武漢周辺で大量に検出された	88	32.8	47.7	19.5

A: 正しい情報だと思った・情報を信じた

B: 正しい情報かどうかわからなかった

C: 正しい情報ではないと思った・情報を信じなかった

総務省「新型コロナウイルス感染症に関する情報流通調査」2020年6月
（出題の都合上一部改変）

<https://www.soumu.go.jp/main_content/000693280.pdf>

- 「C: 正しい情報ではないと思った・情報を信じなかった」よりも「A: 正しい情報だと思った・情報を信じた」と回答した人数が多いフェイクニュースの番号を答えなさい。
- 「C: 正しい情報ではないと思った・情報を信じなかった」と回答した人数が最も多いフェイクニュースの番号を答えなさい。
- このようなフェイクニュースの流布を防止するために、SNS等のプラットフォーム事業者に必要な取り組みを3つ述べなさい（各15字以上25字以内）。

〔問題 2〕

次の文章を 300 字以内に要約しなさい。

あなたが初めて行く店や待ちあわせ場所を探すとき、欠かすことができないのが、スマートフォンの地図アプリだろう。今や、こうしたデジタルメディアに進化した地図であるが、まだ文字すら存在しなかった紀元前の原始社会でも、人間は地面や岩壁などに地図を描き、身のまわりの生活空間の情報に加え、その外部に広がる未知の世界のイメージさえも伝達しあっていた。個人が直接経験できる範囲を超えた空間——「世界」や「社会」——を共有可能なイメージとして全域的に可視化することで、個人と他者・世界を媒介するメディアとして、地図は社会的に機能してきたのである。

こうした地図は、世界をありのままに“コピー”しているかのように思えるが、実際は描き手である人間によってイメージされ、意味づけられた世界を“表現”しているにすぎない。それでも人々は、その時代・社会の規範や欲望に基づいて地図を描き、読むことを通して、地図に表現された世界像を「こうあるべきもの」として共有しているのである。

21 世紀に入ると、地図もデジタル化が急速に進み、そのあり方は大きく変容した。とりわけ 2005 年に登場したグーグルマップは、「世界中の情報を整理し、世界中の人がアクセスできて使えるようにする」というグーグル社の企業理念のもと、世界中の詳細な地図や衛星写真、道路沿いのパノラマ写真を無料で見ることができ、ヴァーチャルな世界旅行を実現する画期的なサービスとして、私たちの生活に大きなインパクトをもたらした。

それに追随したヤフーやアップルの地図アプリも含め、それさえあれば、世界は自分の手のなかにあるようにすら思える。だが、本当にそうなのだろうか。たとえば、恋人と初めてデートするとき、グーグルマップさえあれば飲食店を探すのに苦労しないが、地図上で見つけた店にいざ向かってみると、周辺はラブホテルや風俗店が集まるいかがわしいエリアで気まずい思いをするかもしれない。また、韓国では、グーグルマップの機能が一部制限されており、日本版と同様の使い方ができるわけではない。さらに中国では、国の規制により、そもそもグーグルマップを使うことすらできない。

このように、じつは世界中の情報が整理されているわけではなく、世界中の人々がアクセスできるわけでもないグーグルマップは、世界を描き、世界を開いているといえるのだろうか。逆に、世界を閉ざしてしまう側面はないだろうか。

出典：石田佐恵子・岡井崇之編 『基礎ゼミ メディアスタディーズ』 世界思想社 2020 年（出題の都合上一部改変）

以上